自分で決める！ 地域で暮らす！ を支援する「パンジー（社会福祉法人 創思苑）」（大阪府東大阪市）①

189

デンマーク＆世界の地域居住

エイジング・イン・プレイス

Ageing in Place

松岡 洋子（東京家政大学大学院 客員教授）

２０２４年10月に、ドキュメンタリー映画『大空へはばたこう』（小川道幸監督、パンジーメディア作品）を見た。これは、知的障害のある人たちを描いた単なるドキュメンタリー映画ではない。社会福祉法人 創思苑（大阪府東大阪市）の、日中活動の場に通いながらグループホームで暮らす知的障害のある人たち自身が、実際に取材して描いた作品である。

写真１　クリエイティブハウス パンジー（写真提供・社会福祉法人 創思苑）

この映画では「入所施設は必要なのか？」をテーマにして、施設の歴史を調べ、自分たちのこれまでの歴史を語り、「ぼくたちは、

写真３　クリエイティブハウスパンジーⅢ（写真提供・社会福祉法人 創思苑）

写真２　パンジーメディア（写真提供・社会福祉法人 創思苑）

一人の人間として自分らしく生きる」と、自分たちの希望として宣言する内容になっている。東京家政大学で行われた上映会（注1）には、映画に登場する当事者たちが生で私たちに語りかけ、感動もひとしおであった。

同年12月に創思苑を訪問したが、理事長の林淑美さんは当事者の皆さんに声をかけて話し合う場を設けてくださった。私が聞き取りづらくて困っていると、じっと耳を傾けて代弁してくださる当事者の方もいた。

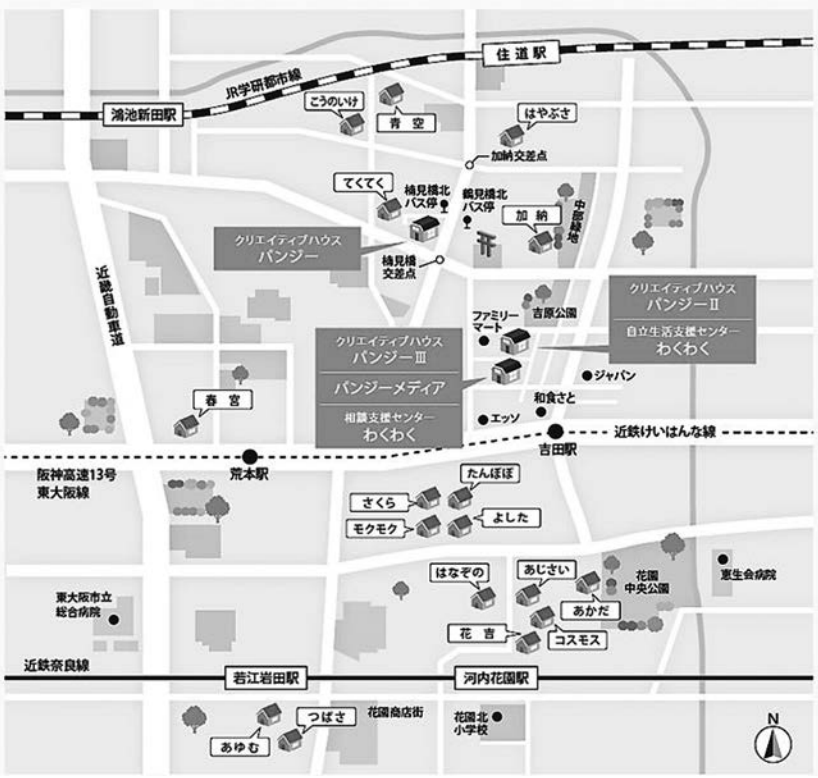
創思苑は、１９９２年に設立された法人である。ピープルファーストの運動に出会う中で、障害のある人たちが自分の力に気づきながら、「自分らしく暮らしたい」と自分で決めて、それぞれに合った方法を一緒に考えて実現する過程を、時間をかけてじっくり作っている。

創思苑の本部は近鉄けいはんな線吉田（よしだ）駅近くにあるが、住道（すみのどう）駅（ＪＲ学研都市線）と河内花園駅（近鉄奈良線）との間には３つの拠点と27のグループホームが点在しており、障害のある人たちの地域生活基盤となっている（図１、写真１・２・３）。

今回は、創思苑の歴史を伝え、次回は、訪問時にお会いした当事者の方々と事業内容を紹介する。

図１　社会福祉法人 創思苑の活動拠点

（イラスト提供・社会福祉法人 創思苑）



理事長 林淑美さんは支援者として関わりながら「地域での普通の暮らし」を模索

創思苑理事長の林淑美さんは、大学卒業後、香川県の中学校の支援学級で教員を勤め、その後、入所施設（香川県）で４年間勤務した。

林さんが入所施設での仕事を始めた１９７０年代は、身体障害のある人が施設や実家から出て生活をする「自立生活運動」が始まった頃であった。しかし、知的障害のある人たちの暮らしはこれとは異なり、支援学校卒業後は、施設か親元で暮らすしか選択肢がない

という状況であった。

林さんが勤めていたのは入所施設の中の子どもの寮であったが、子どもを寮に入れて親が泣きながらトボトボ帰っていき、子どももその姿を見て泣いていたそうである。入所後、親は定期的に会いに来るが、次第にその回数が少なくなって、その子に合わない物を持ってきてしまうようになる。そういう姿を見て、知的障害のある人たちも、地域の中で自分らしく生きてほしい、そんな仕事に関わりたいと考えるようになった。

香川県の入所施設での4年間の勤務のあと、林さんは大阪に出た。そして、障害者の親たちが運営する作業所に勤める。グループホームの制度がない時代であり、施設に入らずに親元で暮らす障害のある人たちは保護者が運営する作業所に通っていたのである。

林さんは、作業所に勤める中で親の想いが強いことを知った。「いい子に育ってほしい」という想いであり、「寝た子を起こすようなことは教えないでほしい」という想いである。これはつまり、化粧をしておしゃれをすることや夜に友達と一緒にお酒を飲むことなど、同世代の若者の暮らしの楽しさを教えないでほしい、ということである。特に女の子にはおしゃれをさせなかった。誰かを好きになったり、なられたりすることはできるだけ避けてほしいと願っていた。そして、知的障害のある人たちが異性と付き合う、結婚するという行為は、一般的にタブーに近かった。

また、作業所では、作業ができる人たちが仕事をすることが中心になりがちで、障害が重い人は取り残されていた。

「どんなに障害が重くても地域で普通に暮らしたい」を支援する「自立の家『つばさ』」誕生

林さんは作業所に勤めながら、「知的障害のある人にも地域で自分らしく生きてほしい」という想いが強くなっていった。しかし、制度やモデルがない中でどうすればよいのかわからなかった。

林さんは、「理念をきちんと打ち立てて、活動できるような拠点を作って、そこから一人ひとりの生活を創り出していってはどうか」と考えながら、当事者や保護者、学校の先生、想いを同じくする支援者が集まって話し合いを始めるようになった。最初は当事者2人と保護者、林さんというこじんまりとしたスタートであったが、その後、当事者は6人、7人になり支援者も増えていった。

この話し合いの中から生まれたのが、「どんなに障害が重くても地域で普通に暮らす」という理念である。

1986年2月9日、民家を借りて「自立の家『つばさ』」がオープンした。家賃や人件費などの費用が必要なので、行政にも相談に行った。しかし、「1年間の実績があれば、継続する力があると認めて補助金を出しましょう」と言われた。そこで、最初の1年間は、みんなで資金を出し合ってのスタートとなった。

「つばさ」の一階では自然食品や子ども向けの食品を販売し、二階を子どもの遊び場にした。地域の人とつながっていく場にしようとしたのである。自然食品を学校に売りに行くこともした。

1年間続いたのちには補助金が出るようになり、当事者の参加も増えてきた。そこで、

名古屋で障害のある人がパン屋を始めたという話を聞き、「パンを焼こう！」ということになった。自分たちが作ったものを売れば喜んでもらえる。誇りにもなるし、もっとみんなが生き生きとしてくるのではと考えたのである。

パン作りを通して「役割を持つ」喜びを知り、「一緒にやる」大切さを学ぶ

パン作りについては、職員や保護者がその作り方を習いに行くことから始めた。最初は何をしてよいのかわからずに待ち続ける人や、参加するがうまくできない人などがいて、順調に進まなかった。しかし、パン作りにはさまざまな工程がある。知的障害のある人が作業をじっと見て理解し、自分ができそうなものや得意な工程を見つけていくようになった。

１９８９年３月「ワークショップパンジー」がオープンし、学校の給食用のパンの注文などにも応えるようになった。パン作りを通して、自分の得意な工程を見つけて役割を持ち、活躍の場ができて「自分もできるんだ！」という気持ちが自信につながっていった。身体障害のある人は、会計や販売を担当した。

こういうことも分かったそうである。軽作業はみんなが同じ作業をするので、一人が欠けても問題はない。しかし、パン作りでは、それぞれが得意な工程を担当するため、「自分がいないとダメだ！　頼りにされている！」という使命感のようなものが生まれていったそうである。また、みんなが分担して進める作業なので、一体感も生まれていったことだろう。

写真４　2010年頃のパンづくりの様子　（写真提供・社会福祉法人 創思苑）

パン作りが軌道に乗って、ひと月にかなりの量のパンを焼いていた時のことである。ある当事者が、職員が朝の６時から準備をしていることを知って６時に来始めた。職員は迷った末に手伝ってもらうことに決め、重いものを運んでもらったり、ちょっとした作業を助けてもらうことにした。そのうちに、その当事者の機敏なサポートなしには、朝の準備ができなくなってしまったそうである。

創思苑では、その頃から「支援する／される」「保護する／される」ではなく「一緒にする」という感覚を大事にしている。林さん自身、このパン作りを始める前までは『知的障害のある人たちは差別される環境にいる』と理解し、『差別や偏見から守る必要がある』という気持ちが強かった」と本の中で書いてい

る。頼りにしたり、頼りにされたりすることで当事者が力をつけていくということを、パン作りを通して体験した。それは大きな発見であった（写真4）。

あんこが入っていないあんパンを納品したという笑い話もあったそうである。

1991年4月グループホーム「自立ホーム『つばさ』」開設。1992年11月社会福祉法人 創思苑設立

パン作りを進めながらも、自立して暮らしていくためには、親元から離れてグループホームで暮らすことが何よりも重要な要件になると、林さんは考えていた。

一方で、身体障害のある人たちとは異なり、知的障害のある人たちのグループホームでの暮らしがなかなか進まない中で、1989年に国がグループホームの制度化を決めた（注2）。林さんは「これだ！」と思い、知的障害を持つ人にもグループホームでの暮らしの可能性を拓くため、1990年7月から「体験宿泊」を始めた。

最初は週1回から始めて、自分たちでメニューを決め、買物をして料理をするプロセスを体験していった。介護については、東大阪市の「緊急介護人派遣事業」を利用して有料とした。週1回を2回へと増やし、時間をかけながら慎重に進める中で、役割やコミュニケーションが生まれてきた。互いに注意し合う場面なども見られた。当事者たちの自立生活に対する熱烈な気持ちや仲間意識の強さに、職員が勇気や確信をもらう体験宿泊となった。

林さんの、グループホームにかける思いには並々ならぬものがあり、その頃の広報誌『つばさ通信』に、「グループホームの制度化となると前途多難なものがありますが、実績を積み上げ、その間、人のつながりを大切にして根を張っていきたいと思います」と書いている。

1991年4月、4人のグループホーム「つばさ」がスタートした。今では、東大阪市内に27カ所もあるグループホームであるが、これがはじめの一歩であった。

「障害者である前に人間だ」という ピープルファーストの考え方に出会って、本当の当事者主体へ

グループホームを開設して間もない1991年、創思苑の当事者たちは「障害者である前に人間である」というピープルファーストの考え方に出会う。アメリカからコニーという知的障害のある人がやってきて、積極的に自分の意見を言い、自分のことを決めて生きている姿を目の当たりにしたのである。そして、1993年のカナダでの「ピープルファースト世界大会」にはじめて参加したのをきっかけに、1998年のアラスカ大会ではパンジーから6名の当事者が参加して、日本のピープルファーストの活動を紹介した。というのも、1994年に大阪で「第1回知的障害者全国交流集会」が開かれ、第4回の静岡大会では「ピープルファースト宣言」を発表するまでになっていたからである。

これに加えて創思苑では、アメリカのピープルファーストのリーダーによる「自信をもつためのプログラム」を体験し、パンジー風

にアレンジして導入していった。例えば、当事者がみんなの前に出て、「アイム、ハッピー！」「私はこんな時が幸せです。みなさんはどうですか？」と一人ひとりに聞いていく。答えると、全員で拍手をするというプログラムである。人気があるプログラムで、何度も何度も繰り返すうちに、「自分が思っていることを言っていいんだ」ということを実感するようになる。

施設では、「こんなことしていいかな」とか、「こんなこと言うたら、しかられへんかな」と思いながら、自分の気持ちを抑えてきた人が多い。「言ってもいい」ということがわかり、仲間たちがそれを拍手で認めてくれる。周りが聞いてくれる。そのことがわかると、「自分たちもできる」という大きな自信につながっていった。

創思苑には、「かえる会」というものもある。支援者中心から当事者中心に「変える」ための会である。これは、２００１年にスウェーデンへ視察に行った際に、当事者が自分たちの組織の理事会委員として意見を言い、運営に関わっている姿を見て驚いたことがきっかけになっている。創思苑では現在、当事者が支援者の面接を行い、当事者が法人の理事や評議員になっている。

支援者は当事者が自分たちでは決められないと思っているから、保護したり指導したりしなければならないと考えがちである。そうではなく、知的障害のある人たちは自分たちで決める力を持っているので、そこを信じて、支援できるような組織でありたいということである。主客逆転の大きな価値転換である。創思苑では、当事者が支援者を辞めさせたこともあるそうである。

創思苑の取り組みは、単にその事業内容を紹介するだけでは、その理念の深い部分を伝えることができないと考えて、今回、その歩みを詳細に伝えた。

知的障害のある人たちは単に保護する対象ではなく、一人ひとりが得意分野や「○○がしたい」という希望を持っている。「行動してみないと、本当の理解はできない」と林淑美理事長が言うように、「これだ！」と思うことに挑戦を続け、当事者たちと一緒に学んで、話し合って、海外からも考え方や活動を取り入れてきた結果が今の創思苑である。このほかにも、スウェーデンで、当事者たちが盛んに情報発信している様子を見て、「パンジーメディア」を立ち上げて毎月動画を配信している。また、ヒマラヤ登山にも挑戦しているそうだ。「したい」という夢を、「できる」という実現へと変えている。次回はその取り組みについて、グループホームでの様子とともに伝える。　文

注１　２０２４年10月26日（土）東京家政大学の大学祭「緑苑祭」にて、田中恵美子教授により教育福祉学科企画として上映されたものである。

注２　グループホームは１９８９年に制度化され、２００６年に障害者自立支援法の中に位置づけられた。その後、障害者総合支援法では「共同生活援助」とされた。利用者は２０２１年３月で約14万人である。